

2025 年度 4 年次アンケート調査の結果報告

本学では、毎年 12 月～3 月頃にかけて、4 年次を対象とした「教育・学生生活に関するアンケート調査」（以下「4 年次アンケート」と表記）を行っている。このアンケート調査は、学部最終学年である 4 年次の学生が、本学の教育内容や学生生活についてどのような意識を持っているのか、また本学学生の学習実態などを明らかにすることで、今後の教育改善に活かすことを目的としている。ここでは、2025 年度に実施した 4 年次アンケートの主な項目の分析結果を中心に報告する。なお、2017 年度以前の課程の専攻である史学専攻の学生 1 名※は、分析の対象から除いた。

※ 「史学専攻」を選択した学生は 6 名いたが、内 5 名は入学年度を尋ねる設問で「2021 年度」を選択していた。2018 年度に「史学専攻」は「歴史文化専攻」に名を改めているため、該当の 5 名は「歴史文化専攻」として処理し、1 名のみを「史学専攻」とした。

調査概要は以下の通りである。

目的：東京女子大学に通っている学生の学習及び大学生活に関する意識・実態調査

方法：Web 調査

対象：東京女子大学に在籍している 4 年次学生、992 名（2026 年 1 月 1 日時点）

調査期間：2025 年 12 月 4 日～2026 年 2 月 12 日

有効回答数：828 名

有効回答回収率：83.5%

調査項目：アンケートの調査票は「基本事項」、「学業」、「学生生活」、「課外・学外の活動」、「学修支援」、「進路」、「その他」（自由記述）の項目で構成している。

本報告書では、「学業」に関する項目から、大学 4 年間の学生生活を通じての授業に対する満足度や、身についたと思うスキル・能力等を報告する。

なお、本調査は当該年度の 4 年次生全員を対象とした悉皆調査（回答率約 85%）であり、推測統計による一般化よりも、実際に得られたデータに基づく記述統計・効果量の報告を主眼とした。また、サンプルサイズも大きいため、ごく小さい差でも有意になりやすい。従って、本報告書では有意確率（ p 値）は報告せず、平均値・標準偏差および効果量（ η^2 および Cohens' d ）のみを報告する。なお、 η^2 については、Cohen(1988)の基準 $\eta^2=.01$ (small), $\eta^2=.06$ (medium) and $\eta^2=.14$ (large) を用いた。同様に、 d についても Cohen(1988)の基準 $d=.20$ (small), $d=.50$ (medium) and $d=.80$ (large) を用いた。ただし、これらの基準値は、心理学・行動科学の分野で慣習的に用いられている目安であり、絶対的な基準でない。

参考のため過去 5 年間の回収率を表 1 に示しておく。2020 年度は、調査方法を質問紙調査から Web 調査へ変更した初年度のため、回収率が例年より低くなっている。

表 1 年度別に見た 4 年次アンケートの回収率

2020 年度 (Web 調査)	2021 年度 (Web 調査)	2022 年度	2023 年度 (Web 調査)	2024 年度 (Web 調査)	2025 年度 (Web 調査)
76.3%	85.6%	80.9%	85.5%	82.8%	83.5%

(1)授業に対する満足度の集計・分析結果

「授業全般」、「全学共通カリキュラムの科目の授業」、「第一外国語科目等の英語の授業」「第二外国語科目の授業」「学科科目（専門）の授業」「卒業論文、Final Presentation、数学講究、情報理学講究」の6つのカテゴリー別に、大学4年間の学修を通じての授業の満足度を尋ねたところ、表2のような結果となった。「大変満足している」、「満足している」、「どちらかと言えば満足している」の肯定的な回答3つを合計した割合は、「授業全般」「全学共通カリキュラム」「第二外国語科目の授業」「学科科目（専門）の授業」「卒業論文、Final Presentation、数学講究、情報理学講究」の項目で9割以上であった。「第一外国語科目等の英語の授業」も89.6%とほぼ9割であり、授業に対する満足度は全体的に高いと言える。

表2 授業に対する満足度

	大変満足 している	満足 している	どちらかと 言えば満足 している	どちらかと 言えば満足 していない	満足 していない	全く満足 していない
	% (n)	% (n)	% (n)	% (n)	% (n)	% (n)
授業全般 (n=799)	25.4 (203)	48.7 (389)	21.3 (170)	3.9 (31)	0.5 (4)	0.3 (2)
全学共通 カリキュラム (n=799)	23.3 (186)	46.8 (374)	25.3 (202)	3.5 (28)	1.0 (8)	0.1 (1)
第一外国語科目等 の英語の授業 (n=799)	16.9 (135)	38.0 (304)	34.7 (277)	7.4 (59)	1.9 (15)	1.1 (9)
第二外国語科目の授業 (n=799)	24.4 (195)	41.9 (335)	25.8 (206)	5.4 (43)	1.5 (12)	1.0 (8)
学科科目（専門）の授業 (n=799)	35.8 (286)	44.6 (356)	16.3 (130)	2.4 (19)	0.6 (5)	0.4 (3)
卒業論文、 Final Presentation、 数学講究、情報理学講究 (n=799)	36.3 (290)	41.6 (332)	17.4 (139)	2.8 (22)	1.6 (13)	0.4 (3)

授業に対する満足度を専攻別に比較するため、まず「大変満足している」＝6、「満足している」＝5、「どちらかと言えば満足している」＝4、「どちらかといえば満足していない」＝3、「満足していない」＝2、「全く満足していない」＝1 と点数化し、それぞれの項目の平均値及び標準偏差を算出した（表 3～表 8）。

表 3～表 8 は、専攻別に見た授業に対する満足度に関する 6 項目の平均値および標準偏差を示している。全ての項目かつ専攻で、満足度の平均値が 4.0 以上となった。「学科科目（専門）の授業」では、効果量（ $\eta^2=.061$ ）中程度で、専攻による差が多少見られた。その他の項目の効果量は小程度で、専攻による違いは見られない。

表 3 専攻別に見た「授業全般」に対する満足度

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.89	0.835	101	$\eta^2 = .051$
哲学	5.34	0.627	38	
日本文学	5.21	0.764	92	
歴史文化	5.07	0.803	84	
国際関係	4.95	0.896	83	
経済学	4.87	0.741	61	
社会学	4.97	0.716	38	
コミュニティ構想	4.81	1.029	43	
心理学	4.83	0.822	72	
コミュニケーション	4.80	0.829	119	
数学	5.11	0.974	27	
情報理学	4.46	0.809	41	
全体	4.94	0.839	799	

表 4 専攻別に見た「全学共通カリキュラムの科目の授業」に対する満足度

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.80	0.837	101	$\eta^2 = .032$
哲学	5.24	0.675	38	
日本文学	5.09	0.794	92	
歴史文化	4.93	0.916	84	
国際関係	4.84	0.969	83	
経済学	4.84	0.757	61	
社会学	4.92	0.712	38	
コミュニティ構想	4.74	0.954	43	
心理学	4.67	0.856	72	
コミュニケーション	4.83	0.857	119	
数学	5.15	0.818	27	
情報理学	4.66	0.693	41	
全体	4.87	0.849	799	

表 5 専攻別に見た「第一外国語科目等の英語の授業」に対する満足度

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.80	0.906	101	$\eta^2 = .045$
哲学	4.68	0.933	38	
日本文学	4.74	0.982	92	
歴史文化	4.60	0.995	84	
国際関係	4.35	1.109	83	
経済学	4.72	0.878	61	
社会学	4.71	0.867	38	
コミュニティ構想	4.33	1.149	43	
心理学	4.18	0.998	72	
コミュニケーション	4.53	1.015	119	
数学	5.00	0.832	27	
情報理学	4.39	0.737	41	
合計	4.57	0.990	799	

表 6 専攻別に見た「第二外国語科目の授業」に対する満足度

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.93	0.972	101	$\eta^2 = .044$
哲学	5.05	0.957	38	
日本文学	4.99	0.805	92	
歴史文化	4.82	0.996	84	
国際関係	4.67	1.094	83	
経済学	4.98	0.826	61	
社会学	4.82	0.801	38	
コミュニティ構想	4.51	1.261	43	
心理学	4.58	0.975	72	
コミュニケーション	4.66	1.060	119	
数学	5.30	0.823	27	
情報理学	4.37	0.767	41	
合計	4.79	0.985	799	

表7 専攻別に見た「学科科目（専門）の授業」に対する満足度

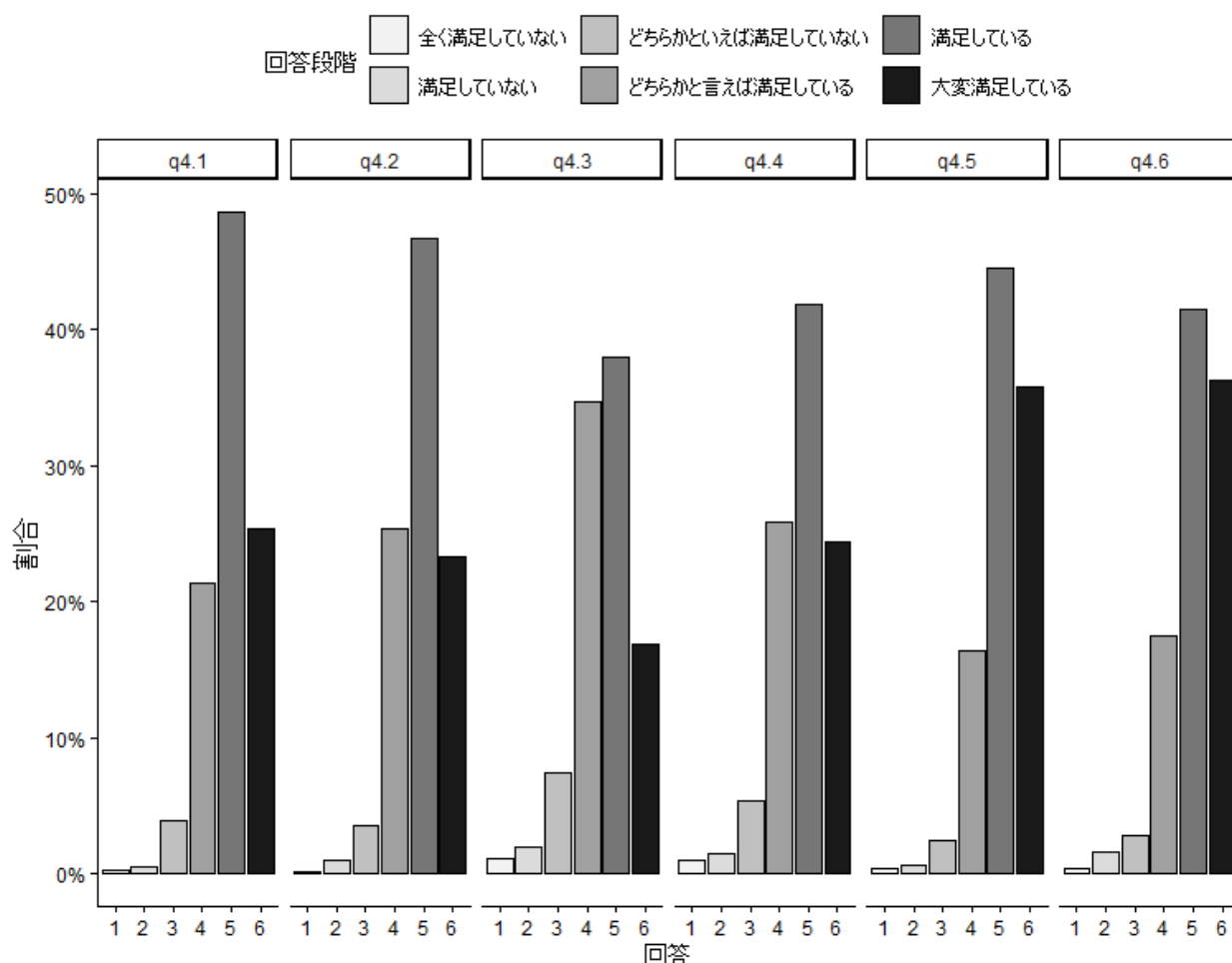
専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.92	0.845	101	$\eta^2 = .061$
哲学	5.61	0.547	38	
日本文学	5.27	0.800	92	
歴史文化	5.36	0.786	84	
国際関係	5.16	0.804	83	
経済学	5.03	0.752	61	
社会学	5.16	0.638	38	
コミュニティ構想	5.12	1.096	43	
心理学	5.14	0.844	72	
コミュニケーション	4.99	0.907	119	
数学	5.15	0.989	27	
情報理学	4.56	0.743	41	
合計	5.11	0.849	799	

表8 専攻別に見た「卒業論文、Final Presentation、数学講究、情報理学講究」に対する満足度

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.94	0.936	101	$\eta^2 = .029$
哲学	5.42	0.758	38	
日本文学	5.15	0.889	92	
歴史文化	5.10	1.093	84	
国際関係	5.04	0.930	83	
経済学	4.98	0.866	61	
社会学	5.13	0.529	38	
コミュニティ構想	5.14	1.104	43	
心理学	5.00	0.856	72	
コミュニケーション	5.01	0.907	119	
数学	5.63	0.629	27	
情報理学	4.83	1.022	41	
合計	5.07	0.922	799	

表2にあるQ4の6項目(q4.1～q4.6)はいずれも6件法による順序尺度であり、各項目の分布を確認したところ肯定的な回答(4～6)に偏った分布を示した(図1)。このような離散的かつ歪みのあるデータに対して通常のピアソンの相関係数を用いると、項目間の関連の強さが過小評価される(減衰する)ことが知られている。そこで、順序尺度に適したポリコリック相関係数を用いて分析を行うことにした。

図1 Q4にある6項目の回答分布



まず、ポリコリック相関行列に基づいて平行分析および探索的因子分析を行ったところ、6項目は単一の因子(授業に対する満足度)で構成されることが確認された(負荷量 = .66～.91)。この結果を踏まえ、信頼性係数についてもポリコリック相関に基づく McDonald のオメガ($\omega = .91$)を算出した。参考として、通常のピアソンの相関係数に基づく Cronbach のアルファ($\alpha = .87$)よりもやや高い値となっており、離散的で歪みのあるデータにおいて相関の減衰が信頼性係数の過小評価につながっていたことが示唆される。

以上より、6項目は単一の構成概念を高い信頼性で測定していると判断できることから、以降の分析では因子得点ではなく、解釈のしやすさを優先して単純な項目平均を用いることとした。6項目の得点を合計し項目数で割った項目平均($n = 799$, $M = 4.89$, $SD = 0.704$, 最大 = 6, 最小 = 1)を算出し(以降「授業満足度得点」とする)、これを分析に用いた。

表 9 は、専攻別に見た授業に対する授業満足度得点の分析結果である。全ての専攻で、平均値が 4.5 以上であり、授業に対する満足度は高いと言える。効果量 η^2 の値を、Cohen (1988) が示す基準 ($\eta^2 = .01$ を小、.06 を中、.14 を大) に照らすと、0.049 は中程度の閾値 (.06) をやや下回る、小さい効果量に該当する。すなわち、専攻という要因が授業満足度得点の分散全体に占める割合はごくわずか(約 4.9%)であり、実質的な影響の大きさとしては限定的であることが示唆された。

表 9 には、全体平均を基準とした各専攻の効果量 Cohen's d の値も示してある。Cohen's d は、絶対値で最大でも 0.50 (全体平均より低い情報理学: $d = -0.50$) にとどまり、いずれの専攻も大きな効果量($d \geq .80$)を示さなかった。 η^2 が示す「全体としての専攻差は小さい」という結果と、 d が示す「どの専攻を見ても全体平均から大きく外れてはいない」という結果は、同じ現象を異なる角度から裏づけていると解釈できる。以上から、専攻によって授業満足度にある程度のばらつきは存在するものの、実質的な意味(効果量)としては小さいものであったと結論づけられる。

表 9 専攻別の授業満足度得点 (平均値・標準偏差・人数) と全体平均を基準とした効果量 Cohen's d

専攻名	平均値	標準偏差	人数	Cohen's d
哲学	5.22	0.567	38	0.47
数学	5.22	0.689	27	0.47
日本文学	5.07	0.671	92	0.26
歴史文化	4.98	0.712	84	0.12
社会学	4.95	0.586	38	0.08
経済学	4.90	0.662	61	0.01
国際英語	4.88	0.715	101	-0.02
国際関係	4.84	0.723	83	-0.08
コミュニケーション	4.80	0.716	119	-0.13
コミュニティ構想	4.78	0.891	43	-0.17
心理学	4.73	0.679	72	-0.23
情報理学	4.54	0.486	41	-0.50
全体	4.89	0.704	799	

図2～図7は、2021年度～2025年度の授業満足度について、「大変満足している」「満足している」「どちらかと言えば満足している」の回答結果を比較したグラフである。

「第一外国語科目等の英語の授業」と「第二外国語科目」の肯定的な回答の合計値は、他の項目と比べて低い傾向があり、若干物足りなさを感じているようである。その他の項目は2021年度から90%以上を維持しており、本学の授業に対する満足度は非常に高いと言える。また、全ての項目で「大変満足している」と回答した割合が昨年度より増えている。

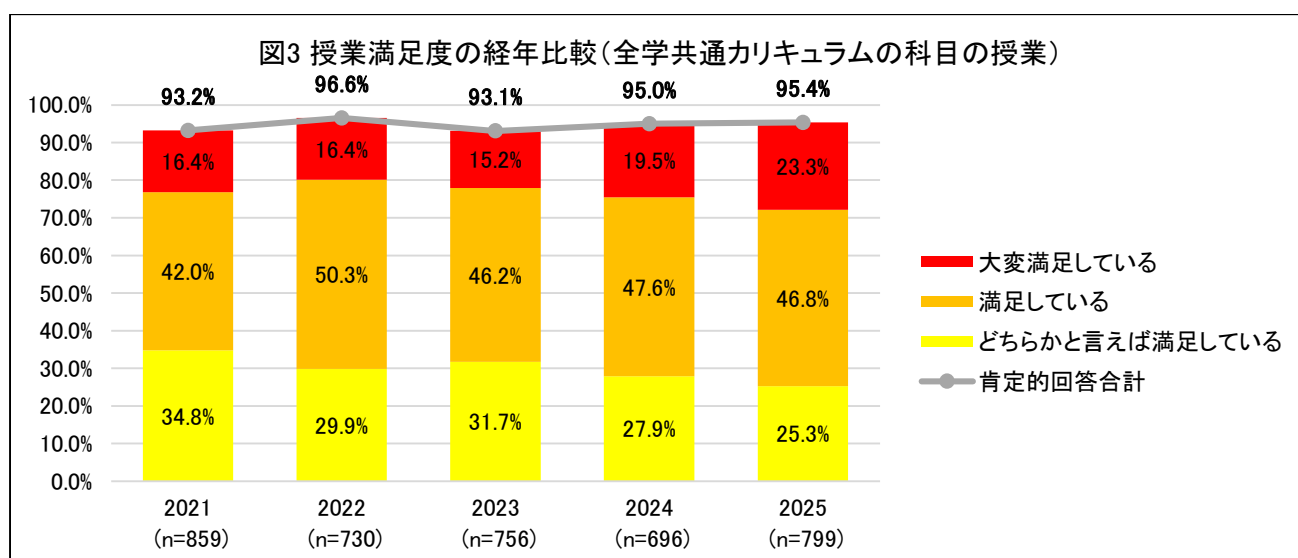
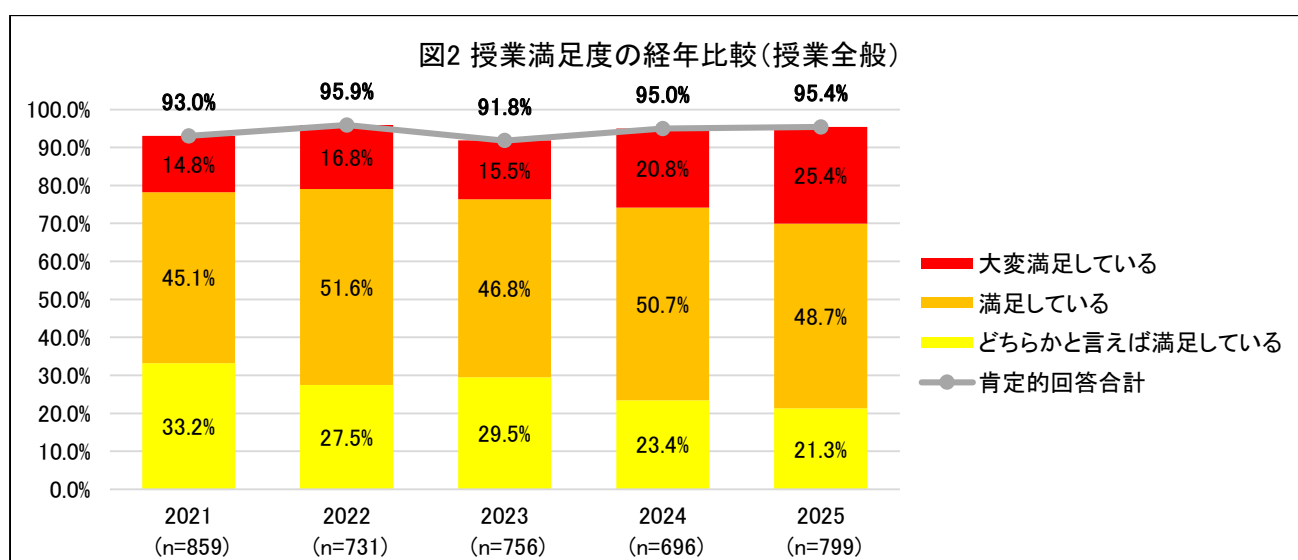


図4 授業満足度の経年比較(第一外国語科目等の英語の授業)

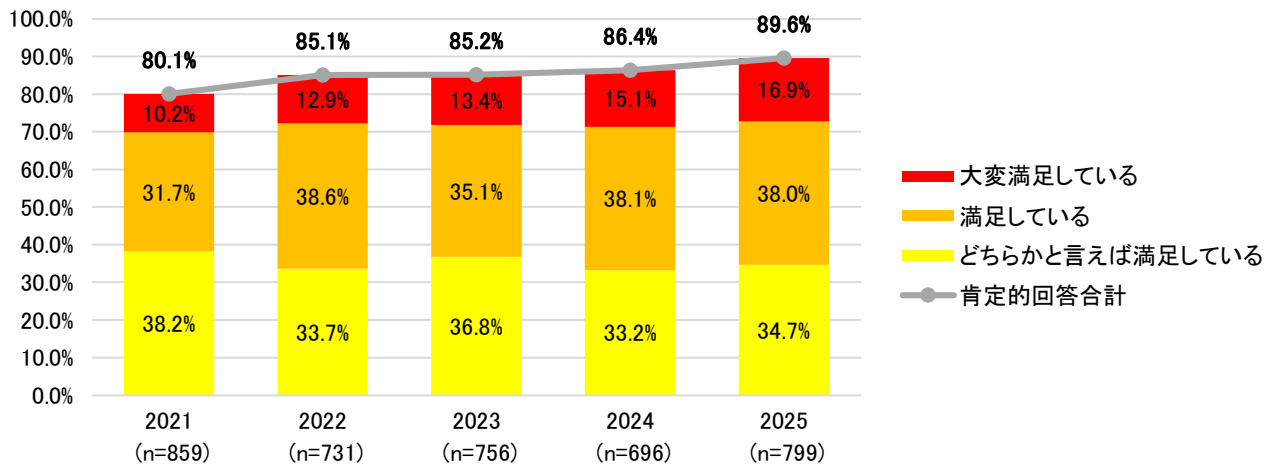


図5 授業満足度の経年比較(第二外国語科目)

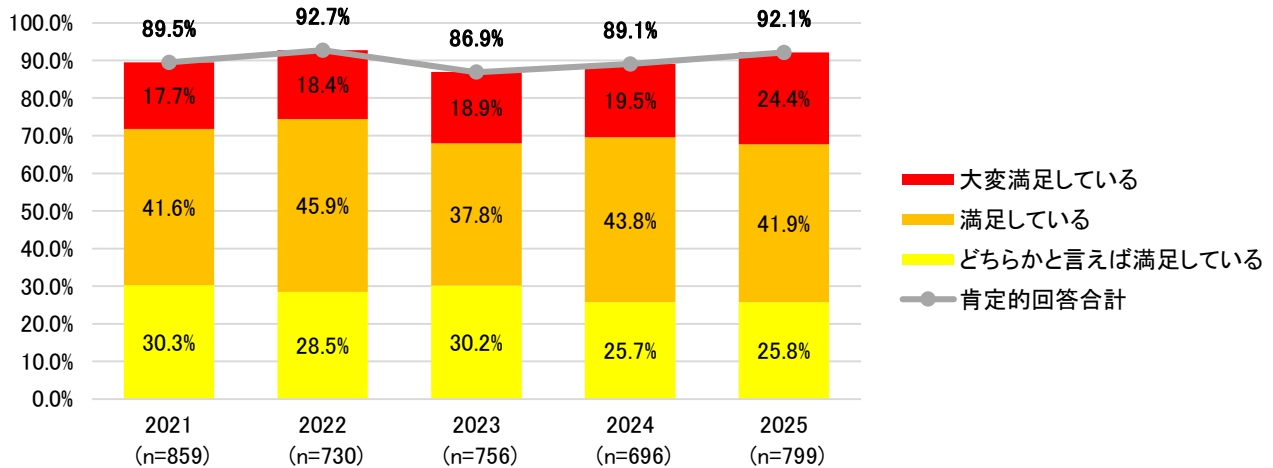
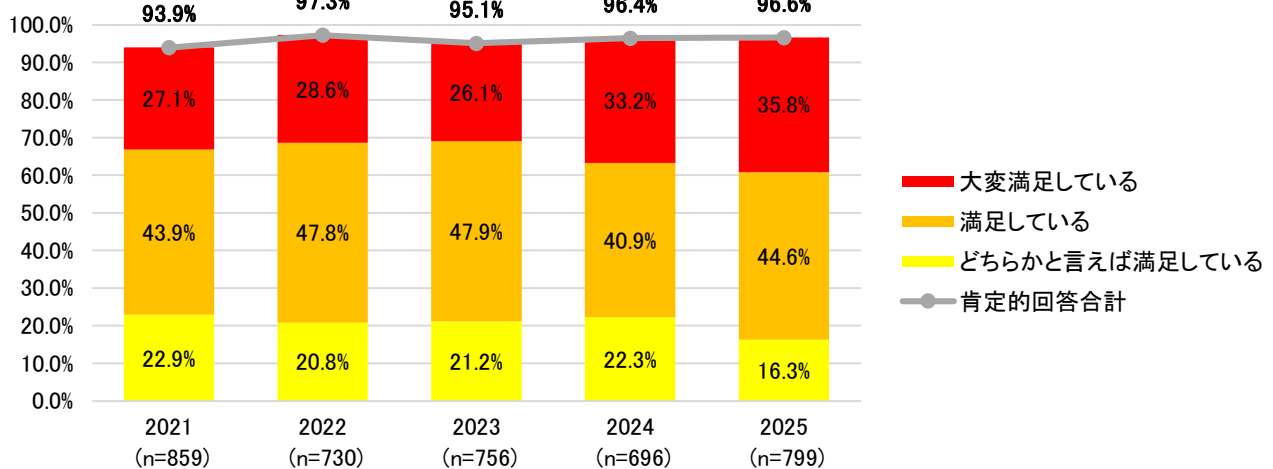
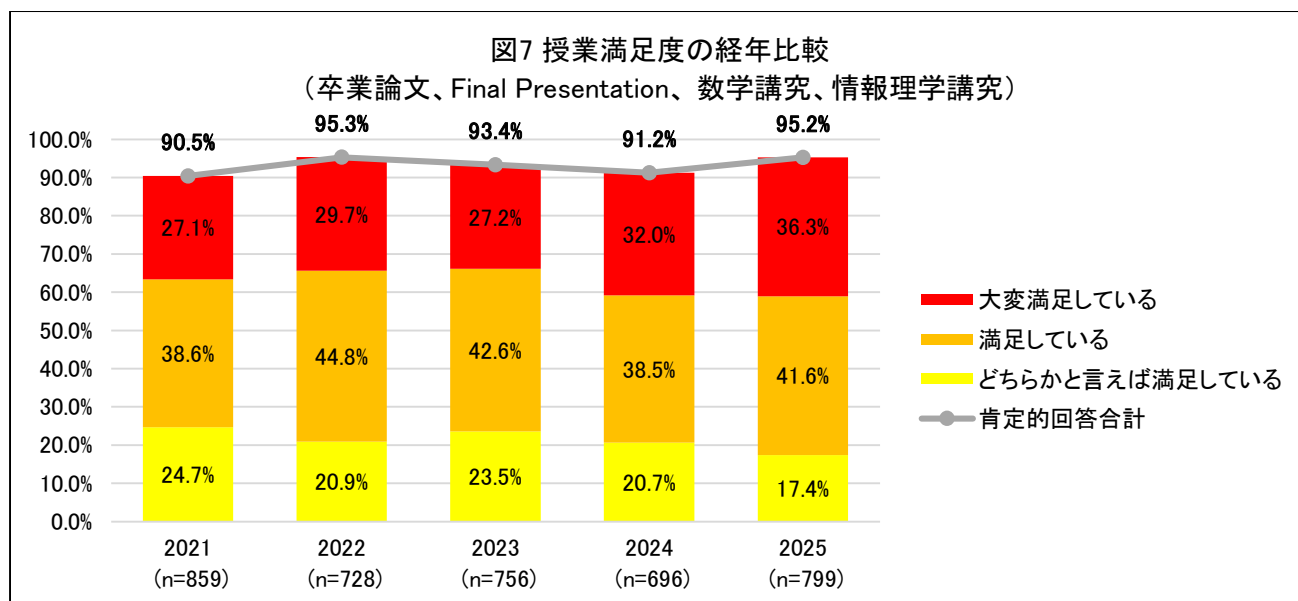


図6 授業満足度の経年比較(学科科目(専門)の授業)





(2) 理解が深められたと思う項目の集計・分析結果

図8は、「大学での4年間の学びを通じて理解を深めることができたと思うこと」を調べるため、「日本の歴史と文化に対する理解」「多文化・異文化に対する理解」「国際的な諸問題に対する理解」「現代社会で生起する諸問題に対する理解」「自然や環境問題に対する理解」「自己の身体に対する理解」「キリスト教に対する理解」「ジェンダー問題に対する理解」「自分の専攻分野に関する理解」「自分の専攻分野に隣接する分野の理解」の10項目について集計した結果である。

「非常にそう思う」「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の肯定的な回答3つを合計した割合を見ると、「自分の専攻分野に関する理解」が最も高く、98.4%だった。次に「ジェンダー問題に対する理解」で96.6%、「多文化・異文化に対する理解」の93.8%であった。

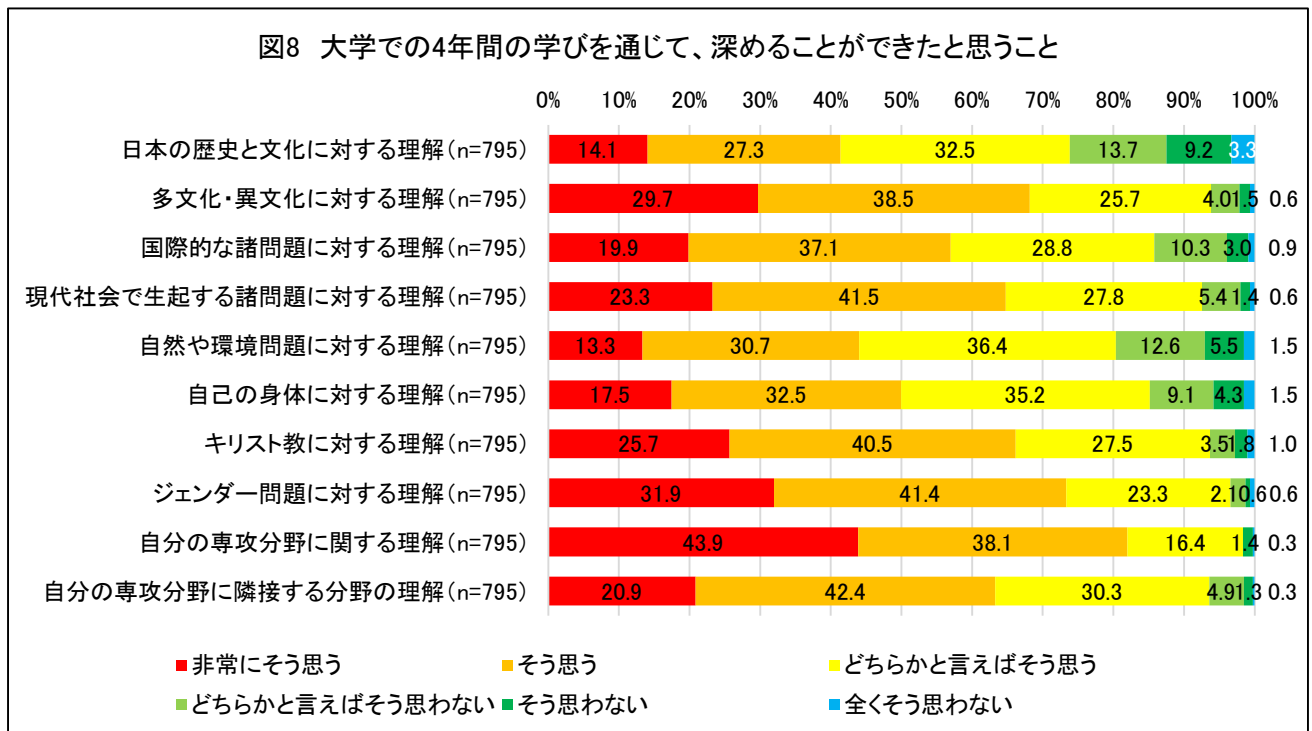
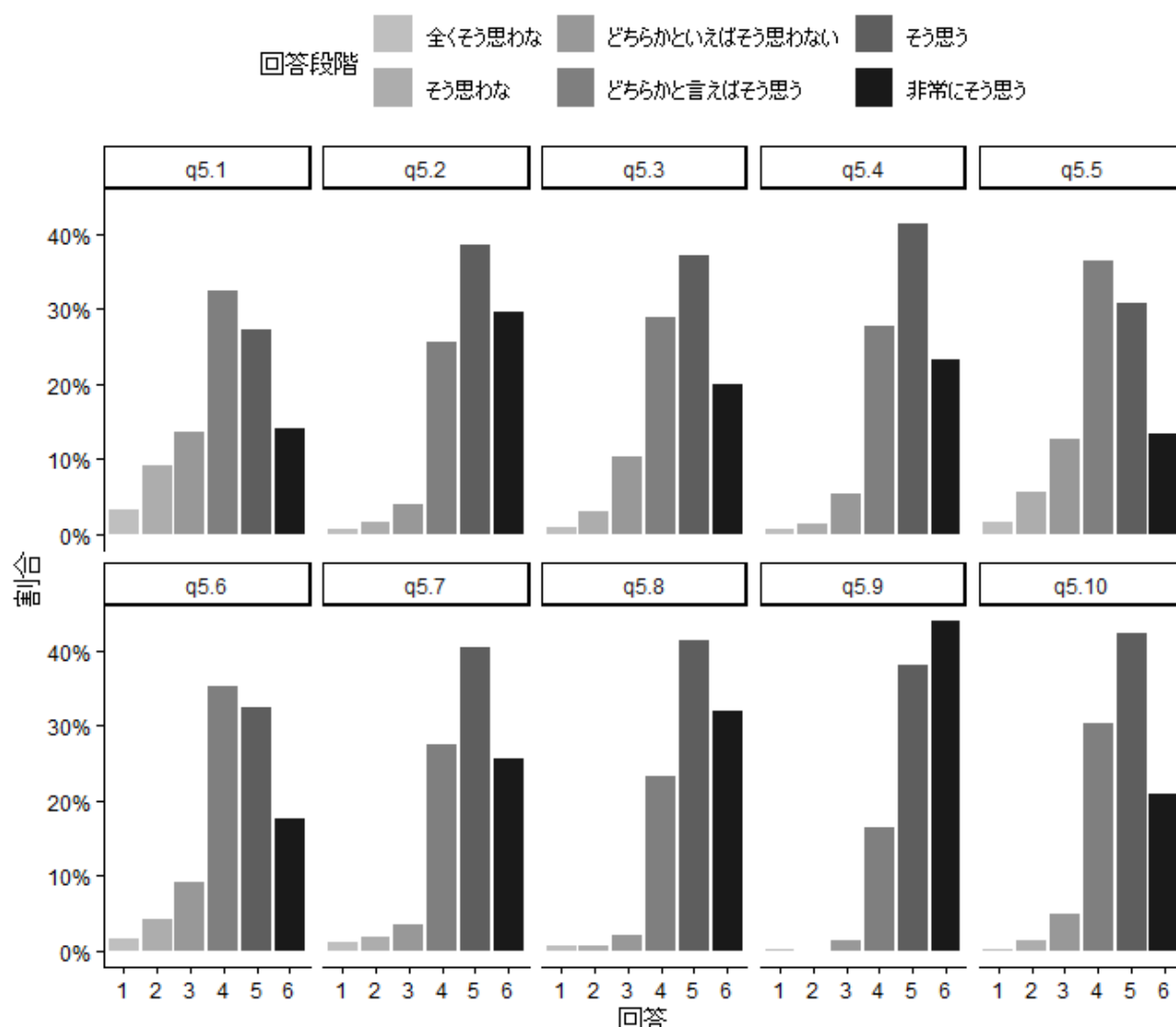


図 8 にある Q5 の 10 項目(q5.1～q5.10)についても、いずれも 6 件法による順序尺度であり、各項目の分布を確認したところ、授業に対する満足度ほどではないものの、こちらも肯定的な回答(4~6)に偏った分布を示していた(図 9)。そこで、ここでも順序尺度に適したポリコリック相関係数を用いて分析を行うことにした。

図 9 図 8 にある 10 項目の回答分布



ポリコリック相関行列に基づいて構造を確認したところ、授業に対する満足度の場合とは異なり、10 項目が単純に 1 つのまとまりとして扱えるとは言い切れない結果となった。因子数を変えながら複数の方法で確認を行ったが、統計的なあてはまりの良さと、内容として意味のあるまとまりになっているかが一致せず、明確な結論を出すことが難しかった。

そこで今回は、10 項目すべての得点を合計し項目数で割った項目平均($n = 795$, $M = 4.69$, $SD = 0.711$, 最大 = 6, 最小 = 1)を算出し(以降「理解総合得点」とする)、分析に用いることとした。なお、10 項目全体としての内的一貫性(信頼性)を確認したところ $\omega = 0.91$ と高い値が得られており、1 つの指標としてまとめて扱うことに大きな支障はないと判断した。

表 10 は、専攻別に見た授業に対する理解総合得点の分析結果である。全体平均は 4.69 であり、多くの専攻で平均値が 4.5 を超えているものの、心理学 (4.36) や情報理学 (4.22) のように 4.5 を下回る専攻も見られた。効果量 η^2 の値を Cohen (1988) が示す基準 ($\eta^2 = .01$ を小、 $.06$ を中、 $.14$ を大) に照らすと、0.076 は中程度の効果量 ($.06$ 以上) に該当する。すなわち、専攻という要因が理解総合得点の分散全体に占める割合は約 7.6% であり、専攻の違いが理解総合得点に対して中程度の影響を与えていることが示唆された。

表 10 には、全体平均を基準とした各専攻の効果量 Cohen's d の値も示してある。Cohen's d は、絶対値で最も大きい情報理学で $d = -0.66$ (全体平均より低い) となり、哲学 ($d = 0.45$) などと併せて中程度の効果量を示す専攻が見られた。なお、大きな効果量 ($d \geq .80$) を示す専攻は存在しなかった。 η^2 が示す「全体として専攻差が中程度存在する」という結果と、 d が示す「一部の専攻で全体平均からの中程度の乖離が見られる」という結果は整合している。以上から、専攻によって授業理解度には一定のばらつき (中程度の実質的な差) が存在すると結論づけられる。

表 10 専攻別の理解総合得点 (平均値・標準偏差・人数) と全体平均を基準とした効果量 Cohen's d

専攻名	平均値	標準偏差	人数	Cohen's d
哲学	5.01	0.609	38	0.45
歴史文化	4.90	0.656	84	0.29
日本文学	4.87	0.647	92	0.25
コミュニティ構想	4.80	0.663	42	0.15
国際関係	4.78	0.718	82	0.12
社会学	4.77	0.605	38	0.10
経済学	4.72	0.684	61	0.03
数学	4.68	0.859	26	-0.02
国際英語	4.68	0.695	101	-0.03
コミュニケーション	4.56	0.717	119	-0.19
心理学	4.36	0.671	72	-0.47
情報理学	4.22	0.753	40	-0.66
全体	4.69	0.711	795	

(3) 身についたスキルに関する項目の集計・分析結果

図10は「大学4年間の学びを通じてどのようなスキルや力を身につけることができたと思うか」を調べるため、「学術的な文献の読解力」、「人の話を聞いて、要点をつかむ力」、「プレゼンテーションにおいて、効果的に話をする力」、「ディスカッションにおいて、論理的に意見を述べる力」、「論理的でわかりやすい文章を書く力」、「わかりやすいプレゼンテーション資料を作成する力」、「パソコンで図表を作成する力」、「課題に応じて、適切な資料を収集する力」、「相手や場面に応じたコミュニケーション力」、「グラフや表で示された統計資料を理解できる力」の10項目について分析したものである。

全ての項目で「非常にそう思う」「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の肯定的な回答3つを合計した割合が8割を超え、本学での学びを通して汎用的なスキルを身につけられたと考えている学生が多い事が分かった。その中でも、「課題に応じて、適切な資料を収集する力」が最も高く、95.4%だった。次に「人の話を聞いて、要点をつかむ力」と「相手や場面に応じたコミュニケーション力」の95.3%であった。

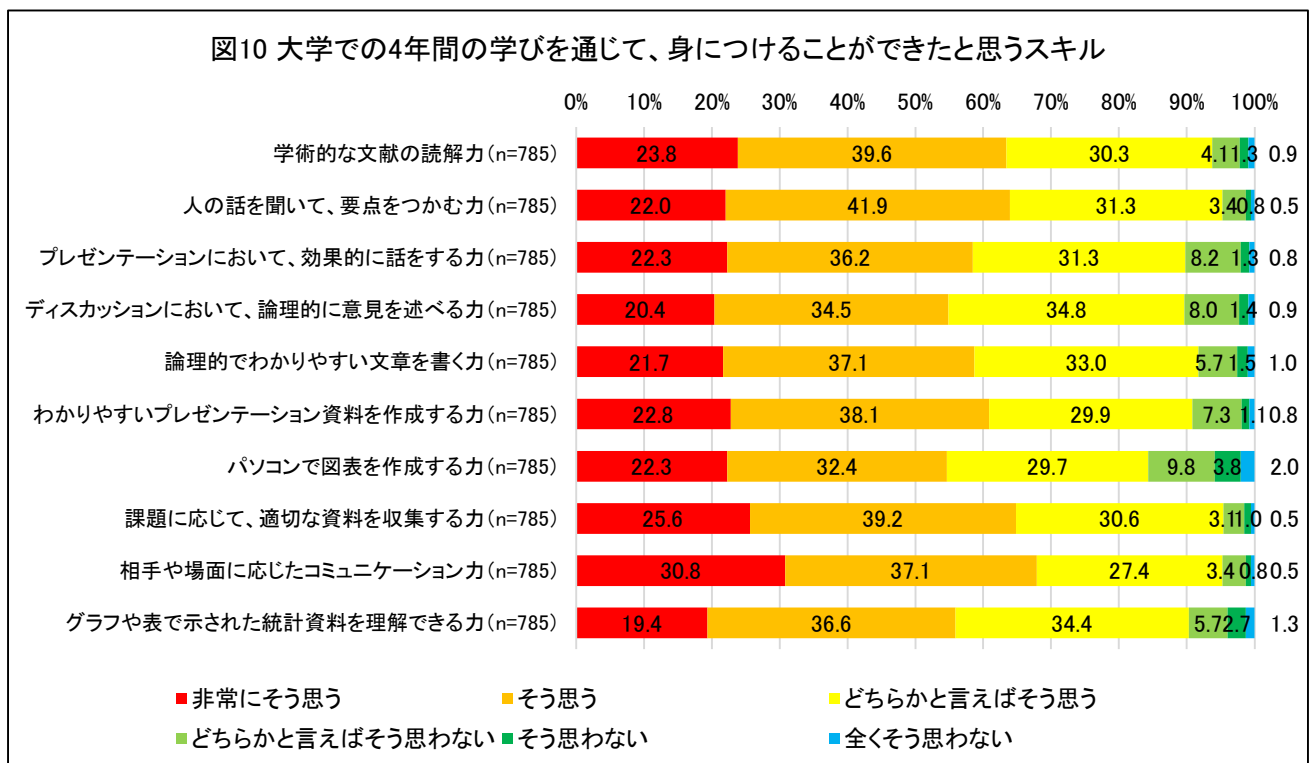


図 10 にある Q7 の 10 項目(q7.1～q7.10)についても、いずれも 6 件法による順序尺度であり、各項目の分布を確認したところ、授業に対する満足度ほどではないものの、こちらも肯定的な回答(4, 5, 6)に偏った分布を示していた(図 11)。そこで、ここでも順序尺度に適したポリコリック相関係数を用いて分析を行うことにした。

図 11 図 10 にある 10 項目の回答分布

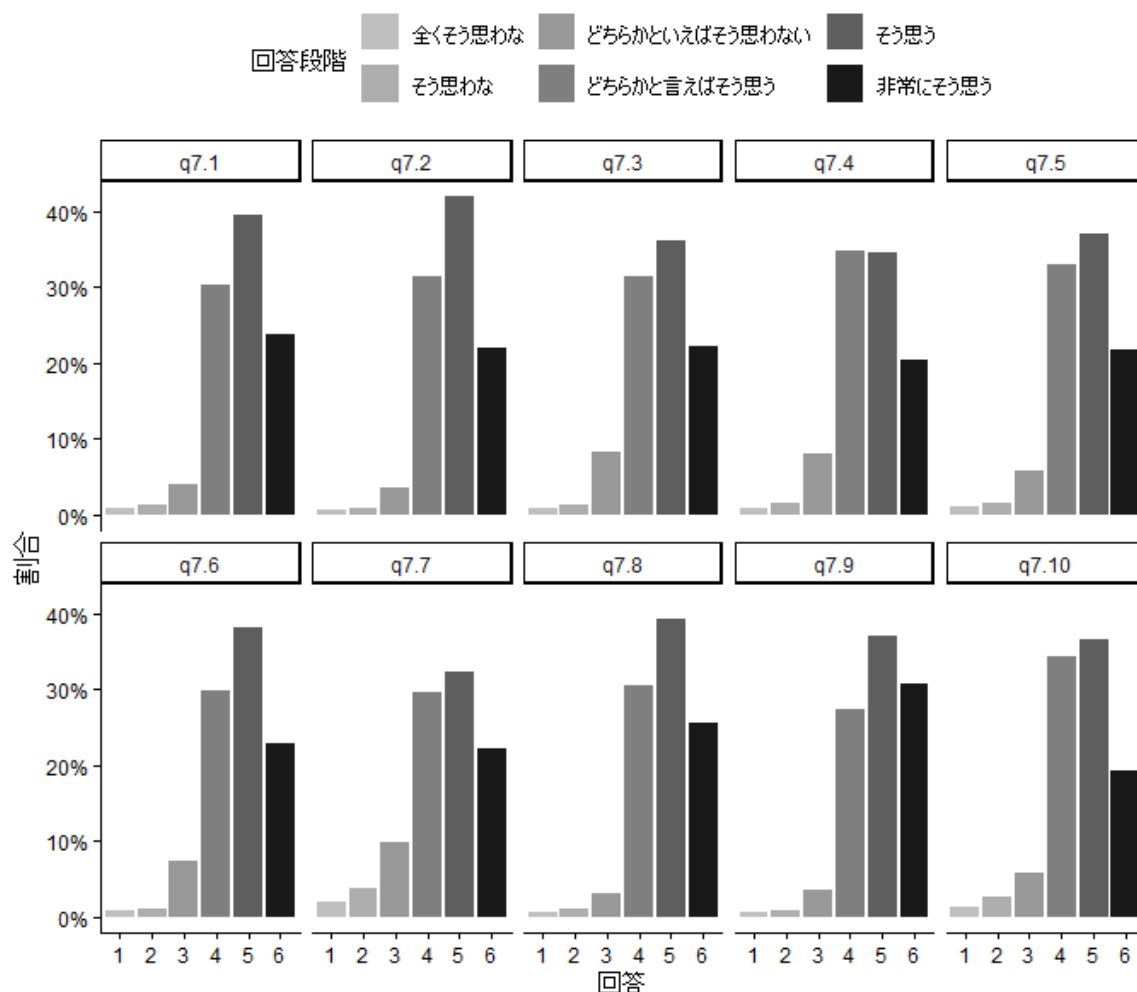


図 11 に示した 10 項目について、平行分析では 3 因子が示唆された。同様に、探索的因子分析の結果、10 項目は「発信・表現力」(プレゼンテーション、ディスカッション、文章作成能力)、「読解・理解力」(読解、傾聴など)、「情報処理・可視化スキル」(図表作成力、統計資料の読解力など)という 3 つの側面に分かれる可能性も示唆された。しかし、これら 3 因子間の相関は.64～.77 と高く、独立した能力というよりは、全体として単一の一般的な傾向(汎用的スキルの自己評価の高さ)の上に、比較的軽微な固有性が乗った構造と解釈するのが妥当と考えられる。

信頼性係数も高い値を示したことから、これまでと同様、10 項目の単純平均を「スキル総合得点」(n=785, M=4.72, SD=0.766, 最大=6, 最小=1)として用いることとした。

表 11 は、専攻別に見たスキル総合得点の分析結果である。情報理学（4.33）を除く 11 の専攻で平均値が 4.5 以上（全体平均 4.72）であり、全体的にスキル総合得点は高い水準にあると言える。効果量 η^2 の値は 0.03 で、Cohen（1988）が示す基準（ $\eta^2 = .01$ を小、 $\eta^2 = .06$ を中、 $\eta^2 = .14$ を大）に照らすと、小～中程度の間にあり、小さい効果量に該当する。すなわち、専攻という要因がスキル総合得点の分散全体に占める割合はごくわずか（約 3.0%）であり、実質的な影響の大きさとしては限定的であることが示唆された。

表 11 には、全体平均を基準とした各専攻の効果量 Cohen's d の値も示してある。Cohen's d は、絶対値で最大でも 0.50（全体平均より低い情報理学： $d = -0.50$ ）にとどまり、いずれの専攻も大きな効果量（ $d \geq .80$ ）を示さなかった。 η^2 が示す「全体としての専攻差は小さい」という結果と、 d が示す「どの専攻を見ても全体平均から大きく外れてはいない」という結果は、同じ現象を異なる角度から裏づけていると解釈できる。以上から、専攻によってスキル総合得点にある程度のばらつきは存在するものの、実質的な意味（効果量）としては小さいものであったと結論づけられる。

表 11 専攻別のスキル総合得点（平均値・標準偏差・人数）と全体平均を基準とした効果量 Cohen's d

専攻	平均値	標準偏差	人数	Cohen's d
日本文学	4.92	0.692	92	0.27
数学	4.85	0.794	26	0.17
社会学	4.81	0.640	37	0.13
コミュニティ構想	4.81	0.742	40	0.11
コミュニケーション	4.77	0.693	119	0.07
哲学	4.77	0.714	38	0.07
経済学	4.73	0.716	60	0.01
歴史文化	4.70	0.811	83	-0.02
心理学	4.69	0.652	71	-0.04
国際英語	4.63	0.785	99	-0.11
国際関係	4.58	0.917	81	-0.18
情報理学	4.33	0.936	39	-0.50
合計	4.72	0.766	785	

(4) 身についた能力に関する項目の集計・分析結果

図12は、「大学での4年間の学びを通じてどのような能力を身につけることができたと思うか」を調べるため、「問題を発見し、的確に把握する力」、「状況を的確に判断する力」、「課題に応じ、収集した情報を、効果的に活用する力」、「物事を偏りなく多角的に検討する力」、「問題を解決する力」、「建設的な意味で批判的に考える力」、「数字やデータに基づいて物事を考える力」、「自らを律して行動できる力」、「責任感」、「倫理観」、「率先してグループをまとめリードする力」、「人間関係を築いたり調整したりする力」、「主体的に行動する力」、「自主的に学習を継続する力」の14項目について分析したものである。

全ての項目で「非常にそう思う」「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の肯定的な回答3つを合計した割合が8割を超えた。その中でも「倫理観」が最も高く、95.9%だった。次に「課題に応じ、収集した情報を、効果的に活用する力」の95.3%、「状況を的確に判断する力」の94.5%であった。

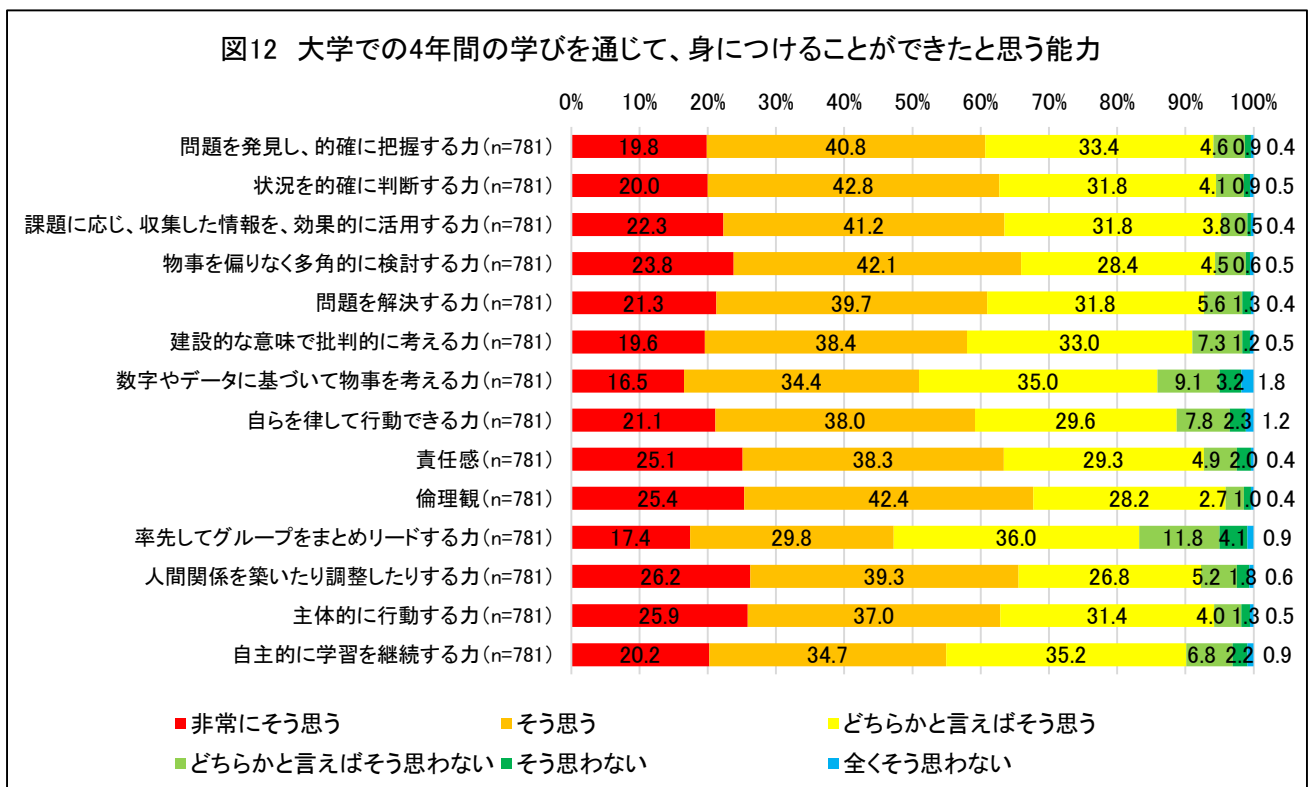
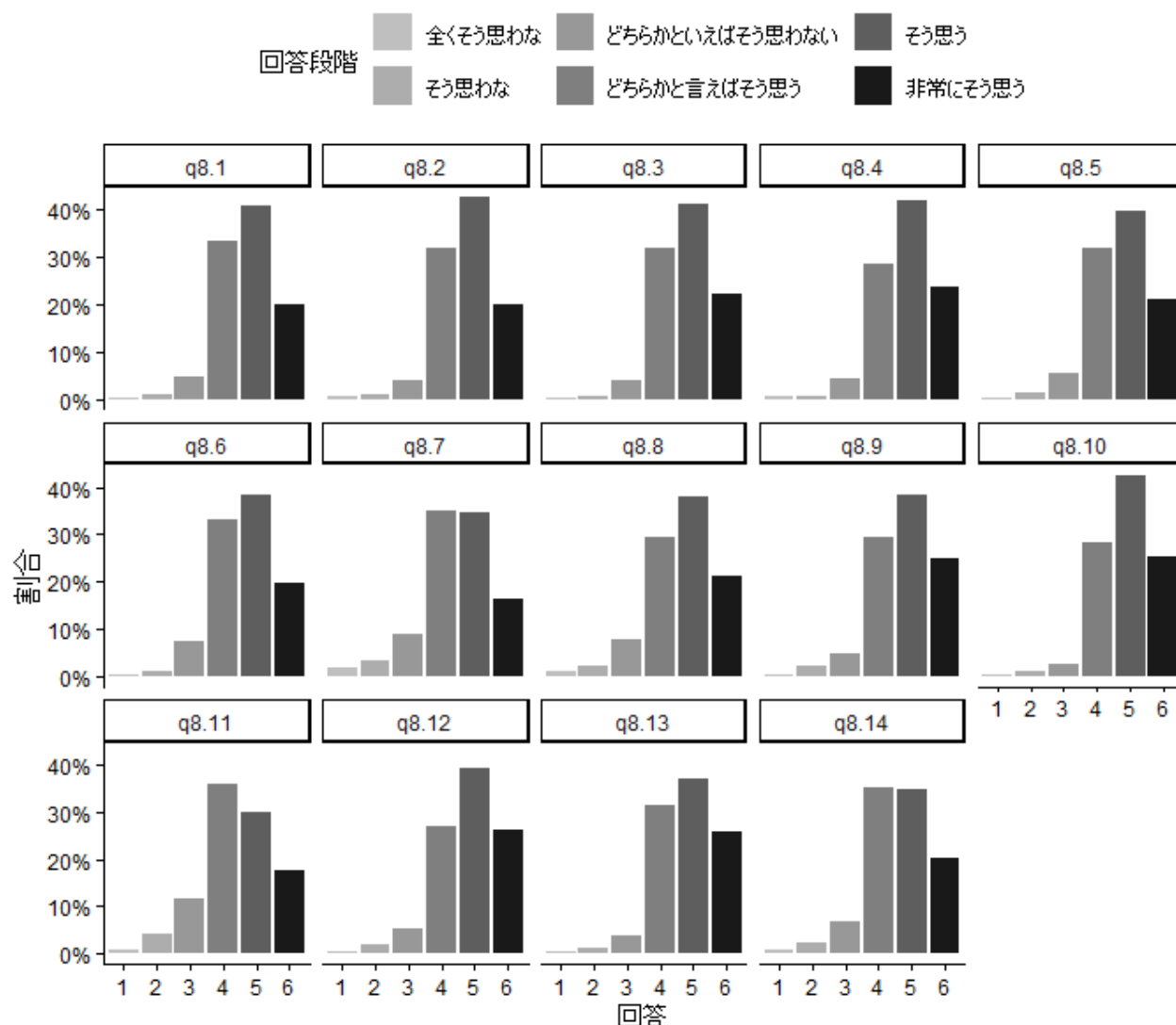


図 12 にある 14 項目(q8.1~q8.14)についても、いずれも 6 件法による順序尺度であり、各項目の分布を確認したところ、これまでのものほどではないが、こちらも肯定的な回答(4, 5, 6)に偏った分布を示していた(図 13)。そこで、ここでも順序尺度に適したポリコリック相関係数を用いて分析を行うことにした。

図 13 図 12 にある 14 項目の回答分布



平行分析では 2 因子が示唆されたが、固有値の落差は極めて大きく(第 1 因子 9.5 に対し第 2 因子以下は 0.5 程度)、また因子間相関も .83 と高いことから、実質的にはほぼ単一の一般因子(社会人基礎力全般への自己評価)に支配された構造と判断した。以上のことから、図 12 に示した 14 項目についても、得点を合計しそれを項目数で割った項目平均を算出し、「能力総合得点」(n=781, M=4.71, SD=0.765, 最大=6, 最小=1)として、専攻別に能力総合得点を比較した(なお、ピアソンの相関係数を元にした信頼性係数: α : 0.96, ポリコリック相関係数を用いた信頼性係数: α : 0.97, ω : 0.97)。

効果量 η^2 ($=.038$) の値を Cohen の目安($\eta^2 = .01, .06, .14$ をそれぞれ小・中・大の効果量とする基準)に照らすと、この値は「小～中程度」の効果量に該当し、専攻という要因が能力総合得点の分散全体に占める割合は限定的であることが示唆される。

表 12 に、全体平均($M=4.71$)を基準とした各専攻の Cohen's d を示す。 d の絶対値は最大でも 0.59(情報理学、 $d = -0.59$)にとどまり、いずれの専攻も大きな効果量($d \geq .80$)を示さなかった。最も d の絶対値が大きかったのは情報理学であり、Cohen の目安に照らすと中程度の効果量に該当するが、全体平均をやや下回る方向であった。次いで数学($d = 0.32$)、哲学($d = 0.27$)、日本文学($d = 0.24$)が、全体平均 (4.71) をやや上回る、小さい効果量を示した。それ以外の 8 専攻については、いずれも d の絶対値が 0.20 を下回っており、全体平均との差はごく小さい水準にとどまった。

この結果は、これまでの Q4・Q5・Q7 の各得点で確認された傾向と同様であり、専攻によって能力総合得点にある程度のばらつきは存在するものの、実質的な意味(効果量)としては小さいものであったと結論づけられる。

表 12 専攻別の能力総合得点 (平均値・標準偏差・人数) と全体平均を基準とした効果量 Cohen's d

専攻	平均値	標準偏差	人数	Cohen's d
数学	4.95	0.801	26	0.32
哲学	4.91	0.698	38	0.27
日本文学	4.89	0.699	92	0.24
コミュニティ構想	4.78	0.742	40	0.09
経済学	4.75	0.663	60	0.05
コミュニケーション	4.74	0.673	118	0.05
社会学	4.74	0.562	37	0.04
歴史文化	4.72	0.831	83	0.01
国際英語	4.63	0.840	96	-0.10
国際関係	4.61	0.861	81	-0.13
心理学	4.57	0.708	71	-0.18
情報理学	4.25	0.891	39	-0.59
全体	4.71	0.765	781	